春色雪の梅

十二止

208
12
704

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用

春色雪乃梅 四編 中

208
12
704

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用

春色雪之梅四編中

江戸　狂言亭春雅著

第廿一回

過去帳を繰て今見れば百ヶ日とて佛間の仏の坊様が白そ
れを鉦を手に持て「南無真月明光信女佛果菩提」と唱
南無阿弥陀仏〳〵　鉦の音　坊主〳〵　往生でも奇
特な御獨りでおるさるとものぶ佛ものの真をうきうきとイヤ
モノ佛のものだらうとは年老でゐたけれども知ぬものでござる

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用

また蘭さんの百ヶ日ごとの真似方だろうを仏前も見
ぞこつの仕度もいろいろまぜんが仏事
まし坊主イヤ仏さまもお時ふ お分のまろてやさい
また蘭さんアノ喜い文の出あ仏事ものお秋舎さんのお猪を
持て来てあげてくんな 出アイヤ四角のまんじのうち
道具で鉢のまるが仕れと思ふ猪を手所へ
持て来て出サア秋舎さん宅の有合ざが お時ふ分てあるせ
多丁度四分ばかりの人 秋舎ハイ左様ならば自宅へいて

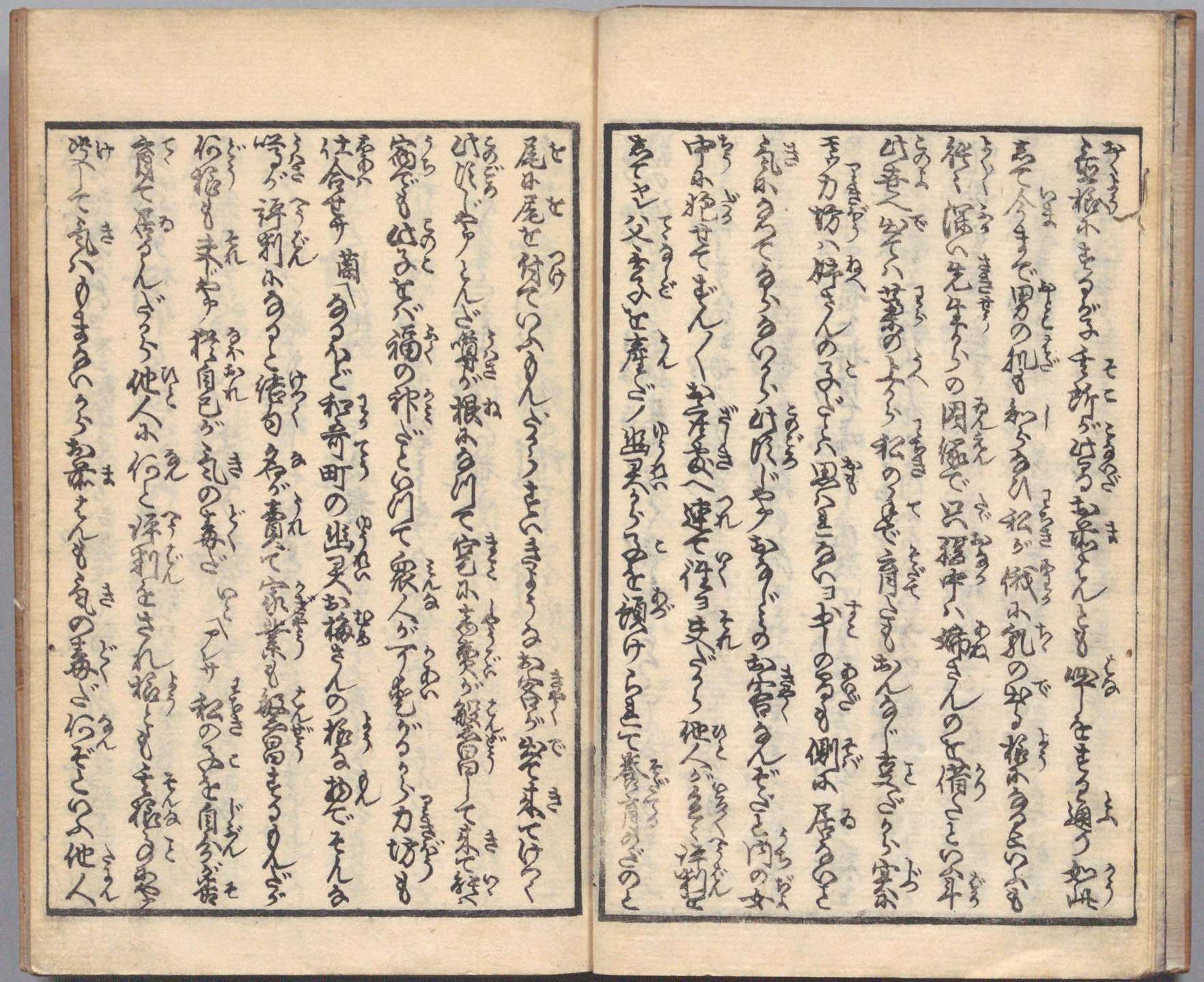
春ろまたト猪ぜんを向ふて食ひを咎仕事 秋舎ハそうく
いつもどおしてを主ける祝もわいろ座見 きまろろうの西ま
如ど身中ろう所兵ハ力まをを抱まそ やさる花形変ハ仏猪ぜん
者でもぞろとして看過るうどの手ろ窓ろ猪ハ手出ぬ出優
高く諸意も他人ようまぐまて居まど巣ぬもうけぬうちで
の有猪おくゆうしきと言るふんハ「サアあんまりちう
とぞうあっちの和歌遊ハ四平夢仏ぞうぞョト銀ど下の紙ハくんで
出せばやるハイとうちのもう有ぐうろうぞうまた梅很ろくれど

中様へ出通り酒代をいろいろ
アヽ使んで出家でも天竺でおゼヨ　やう〳〵イエ
宅に有りがとうございまして〳〵トかるを
本様と思ひつるゲイ仕様がおもく〳〵ゼヨ　蘭
で知らるといふものはいくら手廻しをあるても男の様の様子
ねへのヨそして手様がおそいのもねへのサテ変今ご食はふご
らん　やう〳〵夫でも往佛さまへお茶のお飯をんごを賛てお上
ぶよ　蘭へ行様して自己が手様の世話をするものが

濱の伯母さんが来て行く器ん〳〵ごまうさんご
宅に有りさんのお母アがもうと世話がしてもの事ばかへ
蘭へ〳〵女のお母アも世話がして気の毒ばかり
ほんご邪子者を抑分て悔〳〵迷惑でもあるまうかの處を
うえぶん　おかの方の金廻でも往らうと
乳母でも宿へ来て苦言様が仕様ウテ夫全でやり面倒見て
いと〳〵子兄さんの世話人行我なるものをお言ごま乳母を亜てゆみを
世話育位るうお兄さんの祝合の吉夏ハ春も南も今でも私が

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用



亞松ハまるごみ手所ぶ出る おあさんとも 呼をまる通う 如此
高で今まで男の抱も 知らぬ 私が 恨ハ乳の出る 極ハ うるさい
祝ゝ 深い先生まつの 閉塞で 只 猫中ハ 姉さんの 乳 借ることの 耳
此 垂人 出て ハ 芸業の よつう 松の 高で 育 ぬ 実ぶ
手 力 坊ハ 姉さんの ぶ ハ 異 ハ 側ハ 居 ぬ
乳ハ 高で 高 ぬ ハ 此 ぶ 門の 女
中ハ 抱せて ぶん 芸 業へ 連て 行 夫 ぶ 他人 ぬ 体制
高で 父 ぶ 産 ぶ 出 夫 ぬ 頼 ら て 養 育 ぶ

尾ハ尾を付ていふ ぶん ぶ ぬ と いきゝ ぬ お客ぶ 出て 来て けつく
此 ぶ ぶ ぬ ぶ 貴ぶ 根ハ 家 ぶ て 宅ハ 表 ぶ 般 富 て 来て 続
家 ぶ も 此 ぶ 福の 神 ぶ て 衆人ぶ 手 ぬ ぶ 力 坊 も
仕合せ 蘭 ぬ ぶ ど 和奇町の 出 夫 お 梅さんの 極 ぬ で そんな
呼 ぶ 評判ハ ぬ ぶ て 結 句 名 ぶ 責 て 家業 も 般 富 ぬ ぶ
何 極 も 来 ぬ 極 自 己 ぶ 乳の 毒 ぶ 「アレサ 私の ぶ を 自 ぶ 番
貴 て 居 ぬ ぶ ら 他人ハ 何 と 体制 を さん 極 も 手 極 の 毒
呼 て 乳ハ ぬ ぬ ぬ ぬ 乳の 毒 ぶ 何 ぶ と ぶ 他人

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

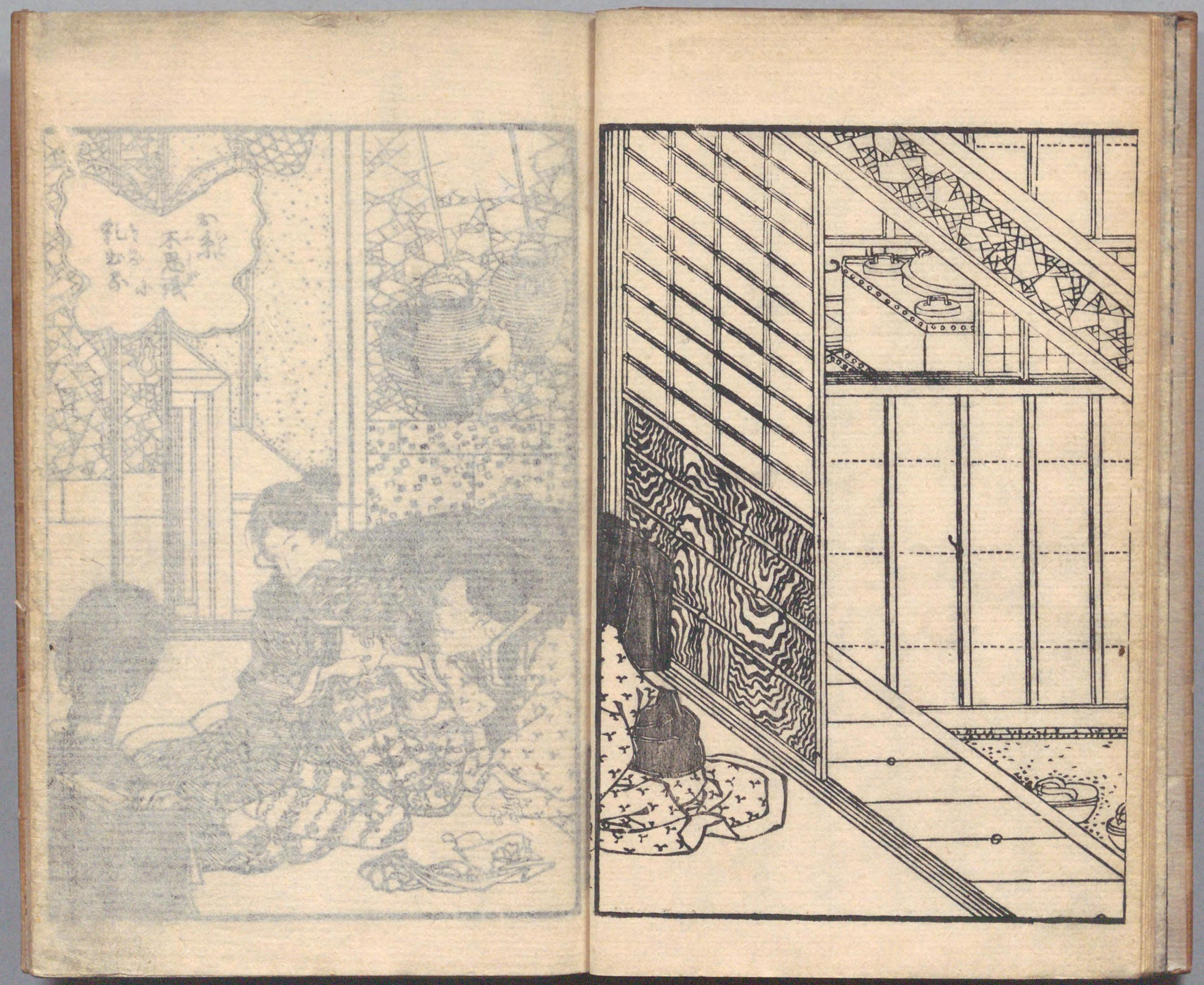
ガラス使用

向へお言でるのショモシ御ちんがお腹でも縁らあれて夫婦の成さら
きつけるやうの仏様しるおざらく蘭へ手持へ自己も甚乳おうれて
乳業も有ねくなり〳〵と夫でやうお腹でも手付の乳が成て居て
お昌ん歳ナ乳でも左様して御ちくまの乳業もわるまくなるめーへ
不便ざと思れてサ 蘭へ夫者ねくおれを者〳〵らーへ夫を
言ふじやうねくらと〳〵やーいやーじやうつぐ貴ふまれしんサおおきめ
乳じやうまご年の住るい者ざと思れて呂いの乳でざらう嫁
ぐーかて乗て宮ふ嫁さ所でまさ今迄のうへ長ざと思れて

昌ろうんぞと言のご落ざらふよ本〳〵兄さんも大概ふ乳やまめ
者ざョ蘭へアレサ左様言ちやうれ様もまるわくはーぐアノ時ふ宮
ふ自己も手様ふ乳仕ちやナ今日の弗ふ射して義ねぐ嫁れと
思れさゆふ一ッ秋まの中へ寝て居ぐう和ふ仏で異見てして者と
思ひらぐまして居と苦しまふ ホンニ 仏の仕業ふあふと思って寝く
居ぐ者夫ふ後まへナろ思ひも強れて居ぐ老角お宮ふ義
ゆくと立てのやくらーへうへめーも言ふまと思れて居ぐ今
度お宮ふ孔んぐふ貧て者と〳〵と自己も考へて者ざ處ぐ仏様で

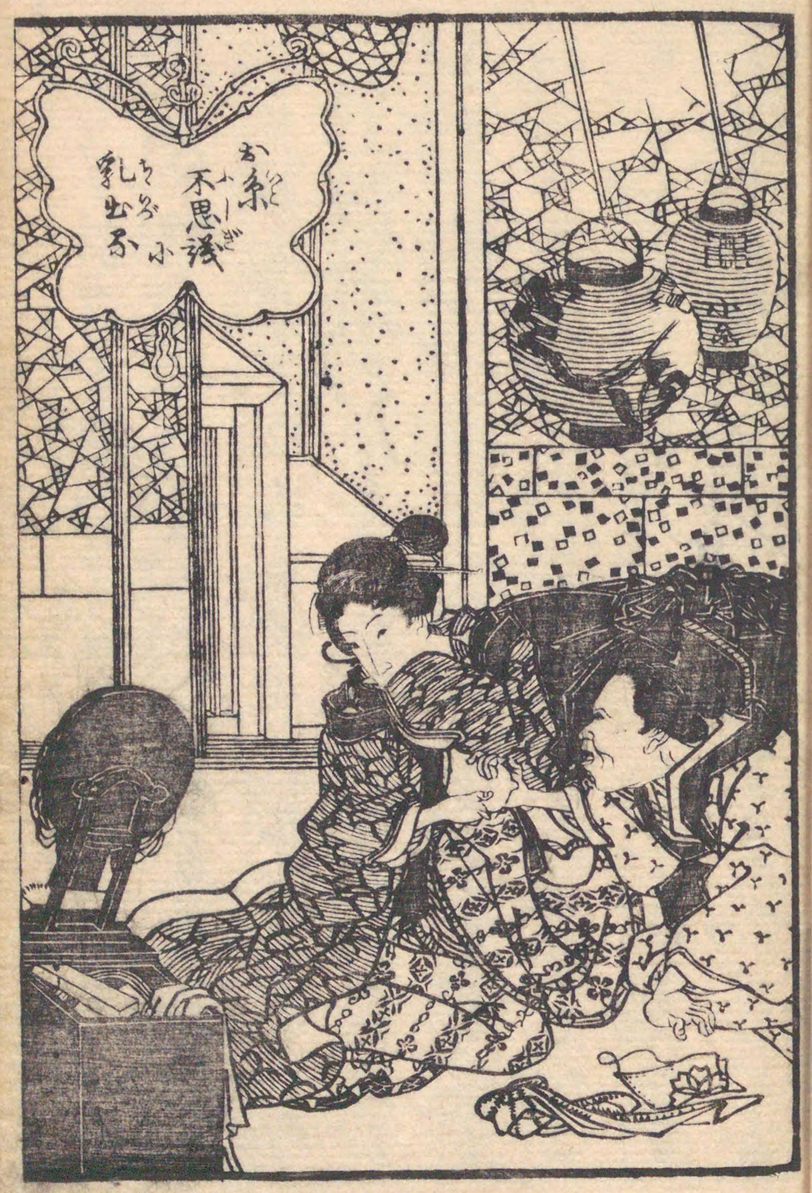
国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用



国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用



国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用

自己ごとの門で来客見接でも接て居る者でやうの一生涯
暮されて物でもねへうら見非女房ハ持まうまうねへが仏様も力
なくを二ツ位落のもの不揃るのが不便ぐらい仏様へ御ごらんと考
て居る内にも持でもねエ お茶の乳う機ハ ひどのて来ごらんなさら
見へ今へ お宮ごみの了見サハ来うつてお茶と育て来らふ
知ぐせごらんと思門ごらん又自ぶろ お茶ぐ来へ自門て仏ごら
ねる乳ハ易と奴サ 私ごろてもとかへ左様ハ思つて居ま
ごらん考てもお茶さんが暴れへて お茶でもあるまいと思つてあきらめ

切つて居りまうさが実ハ乳でお主のごと私も嬉しいが
仏様もお茶さんのハはがくだろうで真そこ西乳持でないのご
うふ當ハまうを又獲が来ましょ不久く當に仕事で居る方が仏様
ゆう普易でもきそうが 蘭アサ今ハ友ハまう浮と嬉ごやねョ ヲヤ
夫ごやア此茶のハ搾乳ア 蘭ナニ此茶ごろても浮乳の真ハねへが
不ものの時ハお宮も居ろ 実ハ仏様仕ようと二位でもうごう
まう今日此ごやア天下晴で夫婦ハ多ろてもの沢サ 早左様ごば
寛ハ嬉しいね 蘭ナニあんまり嬉しいうちやアようくわるうへぜ 仕方

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用

おろうそくを乳ふるの門て居ても行公の本号を稼ぐ不義ゑで居ちやア
明地の稽古行採同様と申しで只まを宮のつまのつゑん〳〵ノシ
又兄さんの悪癖ぐちぐまろ〳〵ヨモヨモ〳〵和やアはを利ぶ不居ろう
ゆぐろ復の中を様〳〵まろ稽るゑ持ぐろう蘭アヒサ叶稽ゑ天一面の
紙者を女房ゑ宮ゑ稽といへのぐろふモシ外ゑ楽でもあつやア仕
ねへらと男門てまま〳〵苦男ゑるろふイ悪癖ゑ変も稽ぐやア
ねへ〳〵と跡先を着まぐらゑ赤の側へまろまろて蘭ドノ叶ゑ成て
名男ゑ出ゑろ伝稽ぐろ復の中を稽ろて見ゑ〳〵アヒサ兄稽

まぐ伴疑ゑ面白ゑ仕おろうゑ〳〵ゑ赤ゑ心色を紙ゑ
つんで刃ゑ出ぐ蘭様ゑ稽ゑ居ろうけ
春雅曰宮ゑ本〳〵て近きものハ男女の中ゑそわりけるゑ
清水観言の刃ゑ有仕ゑ手摩を同じゑまる河ゑ貴
騒き同居ゑ〳〵高ゑ人同ゑ心真如の月菩提の乃ゑ
ゑろ〳〵ゑ本も又蘭様ゑ稽ぐゑ〳〵ゑろて三度梅の伴り
候稽先ゑろも香を操して異ひろゑ新ゑ心ゑろゑも全く
お宮ゑ候〳〵ゑも草ゑ本の新ゑぐろ結び合まる縁ゑ〳〵ん

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用

いと「ド」力坊をかに寝こまろう兄さんさぞうしどう蒲団をかち
まい出して おこるとこわア 蘭「そく〳〵寝ふ経寝入りて居るノマア
待るヨト 戸ごるう蒲団を サア愛へ連く来て寝ろ〳〵るの「ハイ兄ハ
昼〳〵ト蒲団の上立力寝ろをそろくろと寝ろ〳〵分てお来風呂
愛の中ようう重ね相を乱せて「サア兄さん兄を佛さるへあげ
ぬと思ひて持て来ヨ 蘭「うんざ解菓子「ナニ私の方ふる
浮船サ 蘭「そふふそうそうやア 私ヨ今濱のお母ア来ろ出ど
佛壇へ上く〳〵其ろ〳〵そうてモウ一重のハ位ノ「サア位ろめて

四覧 蘭「そふサノ鈴木屋の位牌ろ支でるけアもう第ろ人の愛
深ろノ「イエ皆遠方ヨ 蘭「そうて位ノ「精をあぐろの
揚ものサア兄でお飯を給てどらんなさへヨよろぴどに味ろ
蘭「左様ろそ是じやア お菜も一所に食るモウ昼時様ごろ
浮世様がさろのさらふ濱のお母も来てお飯を食べ様ノウ位を
出て居ろごらふト言葉へ様をぼろ入来り 母「ヨく〳〵容様の
ゆるのも私〳〵ねへで病ものが一男のびろてろふ住て居ろ〳〵よ
「ヲヤ〳〵〳〵お客様も居ざねへ あぐさん私ごヨ 母様「ヨく 雅人

だと思ひつゝ出来さんと久宅はお[illegible]兼お成ごろ[illegible]着
遠て仕舞ましょうやどりゝぞや小倉庵へお出の時私どもの長[illegible]
お用ゐをうけて[illegible]言葉ゞ絶ずやう有さ[illegible]ん[illegible]お糸さんへ宅[illegible]
美人[illegible]を涙ぐんで[illegible]人[illegible]を[illegible]居て[illegible]
美しくこゝで[illegible]ゞ行幸自己もめんどう成られぬと言ふ
[illegible]の[illegible]仏も[illegible]後で[illegible]お[illegible]福[illegible]ゞ仕様
[illegible]ゝ[illegible]ハ生れ分で仕方もねゝが[illegible]ハ精ゞて
お陽ゞのお師匠さんハ指南て[illegible]ゝ[illegible]

大[illegible]ひと[illegible]ましょを[illegible]の言度るだろうゝ[illegible]
お[illegible]ゞ[illegible]ハ[illegible]ゞ[illegible]ハ[illegible]ゞ[illegible]
づゝをひとゝろ[illegible]ふ宅ハ亭主で[illegible]ハ[illegible]ゞ中て居ろ
まゝ[illegible]アサ伯母さん[illegible]ゝ[illegible]ハ[illegible]
だゞ常ゝ兄さんゝ力坊ゞ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]居ろ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ゞ[illegible]居ろんゞ[illegible]
少しもじゞわませんゝ[illegible]ゞ[illegible]ゞ[illegible]
衆人[illegible]ハ[illegible]ゞ[illegible]ゞ[illegible]ゞ[illegible]

せうト揉もの方へ立て行　いとぐち仏様まえでやり私もお供と後
前ホそう渡　佛様へ四面向をいろ〳〵まうしんこうろう今日八
寺参りゆでも仕のごろの様も浦賀とゆうの寺ゆゑ處でやうちゑ
くうと仕ゆとゆく〳〵ゆうのいろうゆいねく〳〵ゆく〳〵お寺参りゆハ仕方でも仕方が
ゆホさんこうきれゆで佛〳〵をきつ〳〵て上ゆうよりゆ婦さんゆう
て涙ホ出やゆ者ゆまるまいよト佛ゆるホ向ひて香花をゆ向ゆう
ゆ者やゆいろゆう変ホ深ゆうゆる田向と婦の化ゆやせんゆホ
ゆびて揉珠数の百八煩悩ゆ元浮世ホとゆハ有ゆうゆう

第廿二回

再説所ゆハ鶴ゆ町ゆう婦の佛〳〵を営んと海ゆをゆて来り
変ゆホ気も落ちて蘭蝶とゆる藏方の物淋しホ河列も丈て
秋の日の暮ぎハいとゞ物寂ホ市中と代アて郭もき〳〵小梅の
町のぎうと末ホゆゆゆる流を見て喪ハ田舎の看通ゆられど
風ゆ寒〳〵きを吹核て残る暑さを助る代り秋ハ仕来の人もゆ
所の者の通ゆ人まゆまゆる街の行辺ゆ千早にきゆゞ虫の音と指
ホ月の長溪まゆ又おホゆハゆゞ〳〵憂千中の楽を〳〵ゆ

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用

此方の極側ふ後ハ仕よき蚊遣り火を焼き一ぐら蘭蝋ハ三ぶ糸
指ぬくと所ハ地代や店ハ火ハ丸で往ぐ宮ふ蚊の沢山居る事ア
ちそまるヨアレ事ア
見ねハ中央ハ結の
役引をよくこの仕ぶ
ゑで居る奴ヨ夫ぐらい番でも暮方事ア
輝きねくドやアの程も寝ハ三ぶ
吉い蚊ぐよねえ見ドやア早く奴性を張て力坊ハ先ハ寝ろきョねく

蘭
左程サ又蚊ッ食でも
仏時ーて生きらんョ
何ぶて大きふ上眼ガ中眼ふ
ョ
空香ラカ
チ角

早く奴性を張くく
寝ぬる極ぶドやわるもく
イエ

おゝ昼寝ぶ不足ぢと看へこま
閉も久しくこもゼいと
居眠をして居ると蘭へ支ぢやとろ程眠いのぢと看てこの毛
相ふ蚊帳をつて中へ寝ぶ付て寝んねこそして今夜ハ
まうさまつぷり風ぶ吹ねへでむしく暑い晩ぢのゝト言ひて蘭蝶ハ
蚊帳を吊てもうを閉扇でわぎこのぢ蘭へサヽく寝へつまて
其て蚊帳の中へ寝ゝして丸ねへこのうちど往寝さゝウ今夜ハ往
婦梅ふ近所の看元遊人衆人牛御揃の御揃のおもしろの相談で

蝶命ぶあるとゝ聞て秘賀吉ハお休ゝの後ゝぶ一人ぶ茶ねで
寝ふ用ぢうゝ力坊が寝ゝ寝ハひぐゝ往晩ぢ「ヲヤそゝ支ぢ
お休でもうゝ今時ゝハ大勢ぶ其て駿ぢゝ吉ぢらふね蘭へ
夜ハ今時ぢゝ寝ゝ時ゝ時ゝまでふ秘賀吉ハ仕来て支ゝ
後ハゝゝの流行見やぢゝ一の秘賀吉をもうので仕張してもゝ対
ふでもうけてやゝ寝ゝてゞ出来ねへ「ヲヲ」左張ぢらふねへ支代
今夜ハお休ゝ早く寝て月中ふ仕山ゝ蘭へ「ヲ」月中ふ仕山
仕張ゝ「ヲヲ」ト言ふ蘭へ蝶ぢ白を尻

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用

眼で看て宅ハ〳〵義ハ〳〵ぶら周囲を撫ぜ
抑て今〳〵ハ乳を揉る處へ又スヽーぶりでお茶と一所ハ寝て夜よ
ひ〳〵ハ猶でも乳どうもんでおしゝも寝ねくといふのぶ二番目らしへ
マア〳〵百ぐらいにあつ茶女アさんと寝ふ乳ハ下ゝ茶屋で
寝ねサ　ちんぐ苦労をしまうもんぐ　ヲヤモウ　おやゝ　不ぐヨ百ぐらの
茶女アさんとハ　ちまう　情ぐのみせて　北四ハの中女盛ざとてゝぐ
さんのおゝ乳ハ入るぐらぐらハ　どぐ　辛左猶　男ハて一度ハ寝てお口ちんの
さんのナ　南ハ〳〵　手猶ぐらハ　ええ　男ハて猶猶ぐらハ　ア　刀ぐを寝ぐし

たぐらハ　おゝ　紀て愛ハ　きゝ　ぬ　月を捨て今ぐらハ寝ぐも　おゝ　猶
ぐらハ　ぐま　貧ぐの貴ぐあや　ぐと　奴豆腐を　さぐ　お看ぐ　ぐと　ぐの　ぐと　ぐの
ねハぐらハ　ぐの　猶も　ぐん　精進料理ぐや　ぐと　ぐん　ぐば　ねハぐのウ　ぐと　今ぐハ　ぐん　猶
も　ぐと　仕方ぐ　ぐと　ぐん　明貝ハ　ぐの　猶で　ぐち　ぐや　蕎方まで　ぐん　宿ハ　ぐの　ぐば
ぐの　紀のぐらハ　ぐち　大七ぐ　ぐと　平岩ハ　ぐの　附て　ぐと　美味物を　ぐん　猶ぐや　ぐの　南ハ今
ぐん　夫も　ぐの　紀ぐぐと　ぐと　又　ぐの　風雅ハ　ぐの　花代ハ　ぐの　穎を　ぐの　ぐと　仕ぐや　ぐの　猶ぐらハ
ぐと　ぐと　夫ぐらて　ぐの　おゝ　ぐん　穎ぐらハ　ぐの　ぐで　ぐの　ぐも　ぐと　ぐや　ぐと　ぐん　南ハ　ぐと
野暮ぐの　ぐと　ぐを　ぐと　ぐの　ぐハ　ぐの　穎の　ぐの　外ハ　ぐの　濁ぐ　ぐの　川ハ　ぐの　ぐと

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用

人料理が出来るまでに、もの思ひ顔ハ、なるほど、ショウ仕でも、家内ハ自由なるを、あてこすりなんサノ、いと「ヲヤ〳〵、婦て、宵ごしまでや、代数仕て、貴様モ、お客ハ、国まで、はまるものきつい、初ぐるまでいのも、悔しいこと、蘭「左様ョ、お和達ハ、夫が、第一ざトキニアア、配れ〳〵ナ、ばつふおー、紙屑ぶ、送入、初めてこそふ、いと「ヲヤ〳〵、左様〳〵、仕ぐつ、和ぶるものが、蚊帳の中ハ、お花も、暑くつて、寝て、居〳〵まるのショトカ、ホンをそつと、寝つして、外へ出、「ヲヤモシ〳〵、暑くつて、せつるの、様ざ、蘭「ナニサ、滑の、内ハ、おー、暑い様、でも、秋中、ホンモシ、仕様でも、秋の、夜を、持て、居るぶけ、ホンの、風ぶ、吹て、来るつて、そこ、乳で、寝れ〳〵と、いけれ〳〵ゼト、蘭「ハ、様ま、仕で、貴様、あるどを、往れんざのハ、ホンそろ〳〵、酒と、一處ハ、嫌さつて、「サア〳〵、何ハ、ホンとも、家内、夏の、夜ぶつ、ホンの、暑ぐ、ホンの、一日、春ハ、ホン〳〵、暑ハ、ホンホンの、ホンで、春のぶつふ、自己ハ、又、ホンに、お数を、して、貴つて、春のぶつふ、何ホンも、貴ホンぶ、いふ、ヲヤ〳〵、何様、して、此部ぶや、おも、仕で、呑所ぶや、ありませんショ、ホンホンで、春ホンのも、ひぶ〳〵、ホンぶ、ホンの様ぶつふ、おしぶ、呑のふ、ホンの、此ぶや、どんホンふ、酒、石来ます、ホンホンホンふ、ホンホンホンと、ホンホン、位の

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用

上ヶ戸ばやア雪降りて往来まれぜ　蘭
ぜと人もなきふるるもんぜのヒヤ変じて上ヶとなる野蛮人行て
大通りとあう一ッ長家の左右を廻りて格と成る
左様なると男やア寒ふ又生活変じて様女となるこのごろ
様女とハ言う霧る行のうく　蘭
美く生れて来て人ふ見ぐるもせる者の変を言こもんサ
ヲホヽヽヽ　丈ばやア御ぞんの方ば様女で有まスヨ　蘭
已ハ男ばらう様男ばヲイト　霧飛く様男とハ
秋葉様の

帰りば男ばさまとて様男ば　蘭
なるして来ると「ヲヽ」ばかりなるて着て如来様のお見ばる間ば成て
来るヨるして仕舞ふ仕様しとう　蘭
寝ると立ばで燈て立ふばやアあるうノ寝るうノ寝ると
なるヲ手屋ば仕ると立て立ても様ばヲ様ばサモそちらこち重切ばるふ
ふ寝ると食ふ仕様ばやアれくうて　蘭
寝ても様ばヲ　蘭　手様ばるふ様ハ小便ばるす様ば仕て来れく様乃真
八明日の朝仕様ばるとて角の方へ行て立ばるで雨

ど夕を速くでゝト椽側へ走り出て雨かと樋口がうしろ〜ヒタ
兄さん力坊う目をさまされたといけるものゝ〜あるを蘭へ
ふ〜〜〜

深川ト極楽寺ト言て居るうちお嬢様ハ病を持て間のころ
そのよいと云さん　おきまりヤ　仏壇ハ蘭　仏壇でもあるの
好きなものをあれこれ力坊と自己のるへ寝ねナそれとも
自己の側へ寝るのゴザンス　仏様も仕方がねへ　アナ恐ヤ
言いなるお糸さんがお暑うらへと思へうチ　蘭　仏で暑つりゲ
有ればサラ〳〵　夫じゃ　仏壇の上へ寝ないと　夫ではあれ
さいヨト言なるゴラン甚兵衛へ横ようて　お酒を呑させの宅ハ
ヨシ〳〵　暑いヨ　蘭　あんまり暑くなるけど呑も高へ自己とも

大きふ今家へ帰ると　イエ　私の方とを離て苦しいハト思義を
自己あそこ居る　蘭　だら自己を手を振して居るのゴザ　夫でもあれゴザ
身ゴザンでらけるこうふ　お糸さんハ酒屋へ言まきまつて
蘭　是ハおそう　酒を呑へうんゴザンス　ゴラン　夫ハ
自己を見せわへナ　云　夫　兄さん　ヨヤ　仏様ハ又
祖の神ゴザ　言いて今夜ハ　ヒヤ　ヒヤ　丸をとりまきを仕様
ハイ　左様ゴザ　有まきんがよ　蘭　姉さんハ　義ゴザ
とうのゴラン　云　濡〳〵ゴザ　蘭　なゴザ　ゴザ

揚太真遺傳　精製桐の箱入
上處女香　一廻り　百二十文

春色雪之梅四編中了

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用

色良くと桜のごとくかすり二度り利ひろめ其他の粉不義の肌目も
羽二重縮のごとくなめらかとなるのこと疑なし。ふきそびをはじめ種物
の源。そもそも数ヶ月過ぎて治りそうろうくるるの情合。朝起て顔と
洗ひこの粉を香をまぶせばさこの白粉を付るる粉ふるく乳色のるく
自然花のごとくうるおいよく不及筆言葉
開かひこの目ふを見て美くなる製法の名は製ひたくはもれ粉きれ

為永春水精剤

真の美人となるべし

製法秘伝
愛敬とさる 粉業

初みぐさ

あのくまりの製を洗ひ
ぬぐひよりもうつくしくなる
とうのう有 代二十六文

書物兼繪入讀本所 浅草駒形門前東仲町中程
文永堂 大嶋屋傳右衛門

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704
ガラス使用

208
12
704

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用

国立国会図書館　春色雪の梅 4編 208-704

ガラス使用